

ヒメアンドンクラゲ



絡み合うヒメアンドンクラゲの雄(上)と雌—©A. E. Migotto博士

久保田 信

54



この小さくかわいいクラゲたちは、熱帯性のヒメアンドンクラゲだ。2006年8月に瀬戸漁港で夜に捕まえたもので、瀬戸臨海実験所を訪問していたブラジルのAivandro E. Migotto博士が撮影した。

白浜では1929年以前に採集されたりしたので、約80年ぶりの出現になる。このクラゲもそうだが、白浜を世界の北限地とする生物が多い。ひとえに黒潮の恩恵と言える。私がヒメアンドンクラゲを初めて見たのは20年ほど前、本場の沖縄だった。港で夜にライトを付けるとたくさん寄ってきた。

このクラゲには変わった性格がある。昼間は傘の中の空所へ触手をすべて折り畳み、平たくなって海底の海藻などにくっついて眠っている。傘のてっぺんにある付着用の装置がこの時活躍する。だから

昼間にプランクトンネットをひいても本種が捕れることはない。夜になると獲物を捕まえるために泳ぎ出す。目がないため、光で誘引して捕まえるのが手っ取り早い方法だ。立方クラゲの仲間はクラゲの中でとりわけ精巧な目を持っている。加えて、その体形から素早い行動ができる。

画像では傘径数ミリの2個体が絡み合っている。これまた珍しいシーンで、配偶行動をしている最中だ。連れ添って触手を絡み合わせ、雄は精子の詰まったカプセルを雌に渡す。画像の真ん中にある透明な筋がそのカプセルである。多い時は8個のカプセルを渡す。

この配偶行動の詳細は、当時、瀬戸臨海実験所を訪問されていたCheryl Lewis博士が中心となって詳しく研究し、2008年に瀬戸臨海実験所の英文報告に掲載された。

(京都大学准教授)